

住

5×緑(ゴバイミドリ)

畦道や里山の 草木が生えてくる都市

文=渡辺朋和

写真提供=アネックス、日本郵政公社



株式会社アネックス 5×緑事業部
住所：〒150-0013
東京都渋谷区恵比寿3-33-3-A
電話：03-3280-2041
FAX：03-5980-2045

5×緑(ゴバイミドリ)は、環境デザイナーやプランナー、クリエイターが集まり、都市に畦道や里山の植生を再現する事業に取り組んでいるプロジェクトチームである。

5×緑の中核となるのは、フトンカゴと呼ばれる金網で作った直方体に、人工土壌のアクアソイルを入れ植栽をほどこす施工法だ。上部と側面にも植物を植えることができ、同じ設置面積でも5倍の緑化が可能になることから、ゴバイミドリの名前がつけられた。

複数のユニットを組み合わせることで、個人住宅の庭から商業施設まで規模の大小を問わず対応できる。

アクアソイルは土に比べ軽量なので、短時間で施工できる。保水性が高く、比較的水やり回数が少なく済む。無機質なので植物が育ちすぎず、メンテナンスが楽という都会向きの利点がある。

5×緑を考案したプランタゴ代表 環境デザイナーの田瀬理夫さんは、「都内で建設され続ける高層タワーは、敷地面積の何倍もの受熱面を作り巨大な熱源になる。ちょうど5×緑の逆ですね(笑)」と、皮肉を込めて5×緑の特長を説明する。



**建て売り住宅のような
画一的な自然に待った!**

ヒートアイランド対策として屋上緑化が注目され、緑化への関心は個人住宅にも広がっている。いまや緑化ビジネスブームとも言えるほどだ。

都会に緑を増やすという点では、5×緑も緑化ビジネスである。ただし、里山や畦道の生態系を作り、本来の自然の姿を取り戻そうと考えているところが大きく違うところ



右：施工前：都会の無表情な一戸建の庭。



中：施工直後：3日間の工事で緑の庭に早がわり。



左：施工3年目：多彩な在来種の草木が茂り、里山さながらの景色に变身。



左：日本における建物緑化のバイオニアとなったアクロス福岡。10年が経過した現在、都市の風景に山景として溶け込んでいる。
 右：地上から高さ60mまで階段状に繋がるステップガーデン。市民も自由に散策でき、鳥や虫たちも絶え間なくやってくる。

だ。田瀬さんたちは、一過性の緑化ビジネスブームに乗る気は、さらさらない。

田瀬さんは東京生まれの東京育ち。東京オリンピック以降、子供の頃に親しんだ自然が東京から消え、そればかりか地方まで本来あったその地域ならではの自然や風景を見られなくなったことを残念に思っていた。なんとか昔の姿を取り戻したい。この思いが環境デザインの仕事を始めた出発点に。5×緑のプロジェクトは田瀬さんの思いが結実したひとつでもある。

「代々木公園は大きな緑地ですが、植えられている植物の種類が少ない。植物の種類が少なければ、集まる鳥も虫も少なくなります。これが都会の緑の実態です。

東京だけならまだしも、全国で建て売り住宅のように同じような種類の木が植えられ、どこも同じ風景になってしまいました。つまり地域の生態系を攪乱してしまっているということ。5×緑では地域にあった在来種だけを生産し植えることで、本来の生態系を復活させます。都市化で失われた植物の地域性を回復していくことで、都市だけでなく地域の再生につながると期待しています」

生態系の復元を目的としているため、現時点では5×緑のユニットは関東の外には持ち出せない。そのため田瀬さんたちは他の地域にも5×緑を広げようと、東海、関西、九州など各地でその地域の在来種を育ててくれる生産者を捜しているところだ。

右：昨年完成した新東京郵便局の屋上にドット式に設置された緑化ユニット。荷重制限や熱対策をクリアするための実験的試みとして注目される。
 左：ナーセリーで養生したものを現場では設置するのみ。作業は短期間で終了する。



人の気持ちや生活を変える
ミドリの子カラ

5×緑が生まれるきっかけになったのは、1994年、田瀬さんがデザインしたコートハウスの中庭の案件。このときフトンカゴを使った植栽を本格的に試みた。オーナーや住人には、「最初は金網が見えていても、緑が濃くなり育っていく感じがいい」と大好評。そればかりか植物とつきあっていると、生活や考え方も変わっていったと田瀬さんは言う。「オーナーの奥さんが、「落ち葉の掃除が大変」と植物を植えることをためらっていましたが、年を経ることに濃くなっていく緑を見て、植物が好きになってしまいました」

田瀬さんが作る庭は野趣にあふれ、いわゆるガーデニング雑誌で見かける、きれいな庭とは、ひと味もふた味も違う。

「雑誌に出てくるようなきれいな庭は、一種の絵です。完成したときが終わり、あとは維持するだけでは気の毒です。5×緑はケヤキやクリなど大きく育つ木が入っていますから、大きく育てるのも剪定をして形を維持するのも家主の自由。育てる楽しみを残し、家主と緑が育つのを楽しむのが僕流の庭づくりです」

販売を担当するアネックスの流本英子さんも、田瀬さんと出会ってから庭に対する

右：伝統的な挿し木や挿ぎ木を通して主に園芸種を育成しているつくばの矢澤ナーセリー。
左：矢澤ナーセリー代表の矢澤光一さん（左）。ユニットの制作も手がけている。



昨秋施工した大田区山王の邸。都会のミニマム暮らしに里山の植生はよくなじむ。



右：懐かしい里山や畦道の植生をコンパクトに再現した里山ユニット。
左：畦道の植生をモデルにアゼターフを生産している、福島県の仲田種苗園の仲田茂司さん。



● 商品問い合わせ先

株式会社アネックス
5×緑事業部
電話：03-3280-2041
URL：http://www.gobaimidori.jp/
E-mail：mail@5Xmidori.jp



田瀬理夫

たせ・みちお / (株) プランタゴ代表。1949年生まれ。千葉大学で都市計画及び造園史を専攻。77年プランタゴを開設し、現在に至る。78-86年(株) SUM建築研究所の一連の集合住宅プロジェクトに参加。プランタゴは、開発計画に対して「土地」の極相を感知し、また理解し、生態・地理・都市・建築・土木・造園など総合的な環境デザインの視点からプロジェクトの最適解を求めて行動している。●仕事：らんの里堂ヶ島(日本造園学会賞)、アクロス福岡(エコビルド大賞)、ピオスの丘、アクアマリン福岡、PAM、地球のたまご、など

(写真撮影=上松尚之)



考え方が変わったひとりだ。「実はバラが好きで、きれいなお庭に憧れていました」ところが5×緑は小さなユニットの中に里山が再現されています。これを見てしまうと、これまで好きだった庭が不自然に見えて、つまらなくなりましたね」

5×緑は近所づきあいも変える。木を大きく育てていくと枝が道路に張りだして木陰を作る。通りがかった人が足をとめ家主と会話をかわす。田瀬さんたちはそんな風景が都会に戻ってくることを期待している。

「上目黒の個人宅で5×緑を使ったときのことです。お向かいさんも新築したばかりで、しばらくすると「うちもやって欲しい」

と依頼がありました。こうやって町内に5×緑が広がり、東京中につながつていくと、おもしろくありませんか。

いまのガーデンニングは、自分だけの楽しみになっていきます。自分も楽しみながらまわりの人も楽しめる庭を、5×緑で広めたいですね」

5×緑には生態系を復元するだけでなく、都会の人間が失った何かを蘇らせてくれるのである。



植物だつて散歩したい
めざすは移動する森

福岡市の中心地。地下鉄天神駅近くに、

天神岳とも呼ばれる里山が現れた。その正体は田瀬さんが関わった「アクロス福岡」だ。地上60メートルから地上へ階段状に連なるステップガーデンに約100種類の木や草が植えられている。竣工して10年で小さな森となり、このまま育てば本当の里山になる。

「60年後にはりっぱな里山になることを期待して天神岳という名前をつけました。10年後には建物を壊さざるを得ないでしょうが、建物といっしょに森を壊すのでは都市のストックになりません。そこで壊す時には森をそのまま別の場所へ移動させることができるようになっていきます」

田瀬さんは動く森というユニークな発想を持つ。5×緑では大きな車輪をつけ高さ9メートル程度の木を植えても移動できるシステムを考えているという。

「ビルの谷間は季節によって日があたる場所が変わります。そこでキャスターを付け、日があたる場所へ移動できる5×緑のユニットを作りました。その発展形としてアトリウムにある植物も、外に移動させ雨風にあて元気を取り戻せるシステムを研究中です。ロボット技術と組み合わせれば、社員が退社した後、自分で外に出て雨にあたる植物もできますね」

建物がバリアフリーになっていくなら、植物もバリアフリーにして、生き生きと生育できるようにするべき、というのが田瀬さんの主張である。